

フリカ

No.82

NOW



TICAD IV開催を契機に行われた横浜市の「一駅一国」運動の一環として描かれた壁画 横浜市営地下鉄センター北駅 2008年8月30日 撮影:茂住衛

CONTENTS



特集: TICAD Ⅳ (第4回アフリカ開発会議) への取り組みを検証する

Special Topic: Evaluation of the activities on TICAD4

NGO と市民の力で何がかちとられたのか

斉藤龍一郎、谷村美能里 3-6

What NGOs & CSOs gained through the activities on TICAD4

TNnet 事務局活動日誌 TNnet secretariat's report

山田真理子 6-7

TICAD IVの「成果」を検証する

高木晶弘、冨田沓子8-13

Evaluation of the "product" of TICAD4

長島美紀 14-15

アフリカ2008キャンペーンを通じて

Thinking about the Africa 2008 campaign

舩田クラーセンさやか 16-21

TICAD IIIから TICAD IVへ 市民社会のパートナーシップの発展 From TICAD3 to TICAD4 - Development of the partnership of Japanese & African NGOs/CSOs

TICAD IVへの対抗アクションから学んだこと

大友深雪、京極紀子 22-26

Learning from critical view of TICAD4

TICAD IVとは何だったのか その空疎で危うい現実を検討する What is TICAD4? - Review of its poor and dangerous reality 高林敏之 27-29

A concept proposal: The TICAD Watch

Gustave Assah30-31 グスターブ・アサー 32-33

(日本語訳) TICAD ウオッチ

書評: 開発フロンティアの民族誌

佐竹ヒロ子 34-35

AJF 事務局から会員の皆さんへ~ひとつの結び目として

表 4

斉藤龍一郎さんと谷村美能里さんに聞く 聞き手: 星野智子 Interview with SAITO Ryoichiro and TANIMURA Minori

NGO の連携と市民の力で何がかちとられたのか

What NGOs & CSOs gained through the activities on TICAD4

一 AJF 理事の星野智子です。昨年初めに、2008年に日本で開かれる北海道洞爺湖 G8 サミット(以下、G8 サミット)向けて 2008年G8 サミット NGO フォーラム(以下、NGO フォーラム)が立ち上がったときから環境ユニットの運営に関わってきました。今年は TICAD IVの開催年でもあることから、大きな二つの国際会議として注目していました。どちらにも NGO と政府の対話の機会をもつなど、積極的な取り組みがあったと思います。TICAD IVに向けた取り組みの中で TICAD IV・NGO ネットワーク (TNnet) がどういった成果をあげたのか、市民社会が TICAD IVにどのように関わることができたのか、聞きたいと思っています。TNnet は、2003年の TICAD III に向けた取り組みを踏まえてつくられたと聞きましたが。

斉藤: TICAD IIIに向けて ACT2003 という NGO ネットワークが作られ、TICAD 外務省・NGO 定期協議を行いました。また、アフリカ4カ所で開かれたTICAD 地域会合に招へいされる NGO の推薦リストを作成し、TICAD IIIへの提言書をまとめました。エチオピア、カメルーンで開かれた地域会合には ACT2003のメンバーも参加しました。TICAD III本会合の約2ヶ月前の2003年8月3日には、アフリカから NGO メンバー9人を招いて、国際シンポジウム「アフリカの NGOがやってくる」を開催しました。TICAD III前日の9月28日には、明治学院大学国際平和研究所と共催で、来日した NGO メンバーを交えた公開討論会も開催しました。TICAD III全体会合のプログラム「市民社会との対話」で ACT2003 代表の小峯さんがスピーチをしました。

もともと期限を定めてつくられた ACT2003 は、TICAD Ⅲ終了後、1993年以来の TICAD に向けた市民の取り組みをまとめた報告書を残して解散しました。前述の公開討論会でアフリカの NGO から、直前になって TICAD に向けた提起をしようといわれても困るという問題提起があったこともあり、2004年に TICAD

IVに向けた活動を目指して TICAD 市民社会フォーラム (TCSF) が発足しました。

TCSF は、アフリカ3カ国でのパートナーシップ・セミナー開催、アフリカ・アラート通信およびアフリカ政策市民白書の発行、2006年2月のTICAD 平和の定着会議および2007年3月のTICAD 持続可能な開発のための環境とエネルギー閣僚会議への参加などの活動を行いました。また、世界銀行や在東京のアフリカ外交団と協力して、アフリカの大使が語るコーヒー・アワーを継続して開催してきました。2007年3月に、TCSFがアフリカに関わる活動をしているNGOに呼びかけて、TICAD IVへのアフリカ・日本の市民社会参加、人びとに役立つTICAD、TICAD を契機としたアフリカへの関心の高まりをめざすネットワークとしてTNnetが立ち上がりました。

TNnet は、趣意書に賛同する NGO が参加するネットワークです。TCSF が事務局を担い、参加団体による月例全体会合でネットワークとしての決定を行ってきました。当初、2007年10月にアフリカの NGO メンバーが来日する機会を活用して開催するシンポジウムに向けた準備、外務省と NGO の定期協議実施が活動の柱でした。5月には TICAD 外務省・NGO 定期協議会(以下、定期協議会)が始まりました。10月のシンポジウムのテーマを「国連ミレニアム開発目標達成のために TICAD ができること」とすることも決めました。

振り返ってみると、TICAD IIIには関わったことのないメンバーが多いなかで、ACT2003が作った報告書とTICAD IIIに関わったメンバーの記憶をたよりに、手探りで定期協議会にのぞみ、シンポジウムの詳細を決めていきました。この過程で、全体会合での議論をよりスムーズに進めるために運営委員会が設けられ、TCSF、AJF、ワールド・ビジョン・ジャパン (WVJ)、ハンガー・フリー・ワールド (HFW)、ほっとけない世界のまずしさ、日本リザルツの6団体が運営委員として、議題の整理や全体会合の進行、定期協議会でのNGO側の発言を分担するようになりました。

さいとう りょういちろう: TNnet 運営委員。AJF 事務局長。

たにむら みのり: TNnet 運営委員。ワールド・ビジョン・ジャパン (WVJ) アドボカシー担当。国際基督教大学卒業。2002年に WVJ 入団。新規支援者開拓担当を経て、出産育児休暇後、2007年に現職として復帰。国際 NGO ワールド・ビジョンの TICADIV・北海道洞爺湖サミットへ向けたグローバルなアドボカシーに、ホスト国側から精力的に参画した。

ほしの ともこ: AJF 理事。環境パートナーシップ会議事務局長。2008年G8 サミット NGO フォーラム環境ユニット事務局。

2007年10月と11月のTICAD IV地域準備会合での市民社会セッション開催とNGO代表によるゲストスピーチ実施により、12月に開かれた第5回定期協議会のときには、TICAD IV本会合への市民参加の形態は、NGOの推薦リストを受けたオブザーバー参加承認とゲストスピーカーによる本会合でのスピーチになることがほぼ固まりました。また、目賀田アフリカ審議官(当時)から「(NGO は)具体的な目標を持って、具体的な提言をしていただきたい」との発言もあり、TNnetとして具体的な課題に即した提言をまとめてアドボカシーを行うことが求められる時期に入っていました。

こうした状況を受けて運営委員会は議論を重ね、より具体的に市民社会としての提言をまとめアドボカシーを行った第二ステージに入ることを決めました。そして2008年1月18日に勉強会「TICADとは~市民社会の関わりのこれまでとこれから」を行い、引き続き開催した全体会合で、参加団体に政策チームもしくはPRチームに参加することを求めたのです。

谷村: 私自身は、ちょうど第二ステージに入る頃、前任者から TICAD IVに向けたアドボカシーを引き継ぎ、TNnet 運営委員として TNnet に参加するようになりました。すでに、日本政府は TICAD IV、G8サミットに向けて保健、教育、水に関するイニシアティブを出していました。TNnet の第一ステージでは、政策論議に深入りしない、個別イシューを取り上げない、という雰囲気があったそうですが、日本政府が具体的なイニシアティブを打ち出しているのはアドボカシーのチャンスだという NGO フォーラムからの呼びかけもあって、TNnet もアドボカシーに向けて動き出したのでした。

今年1月の勉強会の後、私は政策チームのメンバーとしてアフリカと市民の提言 "Voices 2008" をまとめる作業に入りました。横浜宣言の内容が決まると予想された3月半ば過ぎにガボンで開かれた TICAD IV閣僚級準備会議(以下、ガボン閣僚会議)に間に合わせるために、子どもが寝付いた後でパソコンに向かい、チームメンバーと分担してアフリカの NGO とも連絡を取り合い、A4版20ページにおよぶ英文の "Voices 2008" をまとめました。

風邪がはやる季節だったので、舩田さんと二人で、子どもが熱っぽい心配だといったやりとりもしながら、作業に取り組みました。時差の関係で、夜中に出したメールに対しては、アフリカ側からすぐに返信があるのに、日中にメールを出しても返信は夜中か翌日という状態でした。

― 提言の内容はどうやって決まったのですか。

谷村: 昨年の9月にナイロビで、10月には東京でアジア・アフリカ NGO ワークショップが開かれ、市民

社会の提言がまとめられていました。10月に TNnet が主催したシンポジウムでも、TICAD IVの3つの柱・4つの協力分野に対応して、NGO 代表が経済成長・MDGs の達成・平和の定着・環境に関するプレゼンを行いました。今年1月に始まった作業は、これらをもとに提言としてより効果的なものに整理して、教育、平和の定着や環境などの不十分な点を日本およびアフリカの NGO と協議して書き込んでいくというものでした。

TNnet は、アフリカの市民社会の声を TICAD に届けることも目的に掲げていましたが、伝言ゲームのようにこれがアフリカの声ですと出しただけでは効果がありません。日本側から効果的な提言を行うために必要な情報を提供し、また日本の市民社会の提言を交えながら提言をまとめていくことが必要です。

一 環境に関しては、私たちのところにも呼びかけがあったのですが、残念ながら、NGOフォーラム環境ユニットは余力がなくて対応できなかったのです。提言をまとめる力になったのは何でしょうか。

谷村: TNnet を代表して TICAD IV地域準備会合に参加したメンバーとアフリカの NGO が、現場で話をしながら提言をまとめスピーチの内容を練り上げたという共通の体験が大きな力になりましたね。一本化したまとまった提言の必要性は日本側から投げかけたのです。

― 提言を一緒に作ったアフリカの NGO は、どんな団体 なのですか。また、提言は効果がありましたか。

斉藤: TNnet がまだ立ち上がっていない昨年2月に、ナイロビで開かれた世界社会フォーラム (WSF)でTCSFはワークショップを開催しました。このワークショップを出発点に立ち上がった Civic Commission for Africa (C-CfA: 市民アフリカ委員会。2005年グレンイーグルス G8 サミットに向け当時の英ブレア首相が立ち上げた Commission for Africa の市民版を意味する)、TNnet 参加団体がそれぞれに協働しているNGO、アフリカ連合 (AU) に向けて「アフリカ諸国は予算の15%を保健に」というキャンペーンを行っているNGO 連合など、さまざまな NGO や NGO ネットワークと一緒に "Voices 2008" をまとめました。

谷村: 提言を提出したガボン閣僚会議の後、私たちの間ではガボン・ショックというのがあったのです。この会合に出された「横浜宣言」案文と「横浜行動計画」骨子のいずれも、予想以上に問題が多かったのです。TICAD IVの成果が G8 サミットにも反映するというのであれば、このままではいけないということで、NGO フォーラムの貧困開発ユニットと一緒になって、

政府のさまざまなレベルの関係者に向けてアドボカシーを行いました。こんなことしか書かれていない「横浜宣言」と「横浜行動計画」であれば誰も参照しない、G8も参照できない、と訴える一方で、保健については具体的に何をなすべきかを書いてみせました。「横浜宣言」に「市民参加」が書き込まれ、「横浜行動計画」に具体的な内容の別表が付されたのは、TNnetとNGOフォーラムが一緒に取り組んだアドボカシーの「成果」だと思います。

— G8 サミットと TICAD IVが日本で同じ年に開かれるというので、アフリカへの注目が集まりましたが、TNnet は、G8 サミットに向けた行動にどのように関わったのですか。

谷村: ガボン閣僚会議のときは、保健が大きな課題の一つでしたので、NGOフォーラム貧困開発ユニット保健医療ワーキンググループがアフリカのNGOと一緒に参加してアドボカシーを行いました。それ以前から課題となっていたNGOフォーラムとの共同が具体的に始まったのです。この会議の直後の4月に、G8サミットの一環として東京でアフリカ・パートナーシップ・フォーラム(APF)が開かれました。このときNGOフォーラムとTNnetが一緒になって、アフリカから参加するNGOメンバーの数を増やし、また参加する時間と機会を増やすために努力しました。

私自身、NGOフォーラム貧困開発ユニットでも活動していたので、4月に京都で開かれたシビルG8のときは、昼間はシビルG8分科会の司会をして、夜は冨田さん、舩田さん、稲場さんたちとTICADIVに向けた打ち合わせをしていたのです。寝る時間もありませんでした。シビルG8にも、TNnetが招いたアフリカのNGOが参加しました。このときに来日したC-CfA議長のグスターブ・アサーさんは、そのまま1ヶ月、日本にいてアフリカ市民社会の声を日本の中で伝えてくれました。メディアへの登場も多く、TICADIVへの関心を高めたと思います。

TICAD IV終了後、私自身は参加しませんでしたが、G8 サミット時には、国際メディアセンターに TNnet を代表して冨田さんがアフリカの NGO メンバー二人と詰めて、記者会見などを行いました。G8 サミットでもアフリカは大きなテーマの一つでしたので、質問や取材も多かったと聞いています。

— TNnet は NGO とだけ一緒に取り組んだのですか。

斉藤: 昨年10月のシンポジウムは、TNnet と国連開発計画 (UNDP) との共催でした。国連機関は TICAD 外務省・NGO 定期協議にもオブザーバーで参加していましたし、さまざまな形で接触がありました。

谷村: 運営委員がそろってガボン大使館を訪問し、



斉藤龍一郎さん (左) と谷村美能里さん

在京アフリカ外交団と話し合いの場を持ったこともあります。在京アフリカ外交団は、TICAD IV直前の第7回定期協議会の後の官民連携協議会にも参加して発言してくれました。

斉藤: 前回までと違って、TICAD IVの会場が横浜だったので、横浜市がTICAD IVに向け、小学校全校に20万枚のアフリカ理解リーフレットを配布し「一校一国」運動を実施する、国連機関や市内の大学と共同でのシンポジウムを開催するなど、非常に積極的な取り組みをしました。

谷村: 横浜 NGO ネットワーク (YNN) が TNnet に参加したこともあり、TICAD IV直前の5月25日に開催した People's TICAD ではは横浜市の協力も受けています。People's TICAD といえば、PR チームの活躍も紹介しなくてはいけませんね。TICAD IV本会合に向けて政策チームがアドボカシー活動に追われている一方で、PR チームの活躍があったから People's TICAD が実現したのです。

また、PRチームがアフリカン・フェスタ 2008 のプログラム委員会で強く主張し、また実際に作業を担ったおかげで、アフリカン・フェスタのメインステージで TICAD IVの課題を紹介するセッションが開かれました。外務省から業務を受託したアフリカン・フェスタ事務局が最初に出した案は、歌って踊ってそれだけ、というものだったのです。PRチームのメンバーが司会を務め、政策チームのメンバーが TICAD IVの4つの協力分野について解説したセッションは、立ち見も出ていたそうです。

TICAD IVではフォローアップ・メカニズムも決まりましたが、TNnet は今後どのようにフォローしていきますか。

斉藤: TICAD IVの開催後の6月27日に行った最後の 定期協議会で、木寺アフリカ審議官(当時)は、フォローアップ・メカニズムに関する質問に対して「フォローアップ・メカニズムには、市民社会が参加するとは書かれていない」と即答していました。共催者およびアフリカ諸国が集まって TICAD IVでのプレッジ(公 約)の進捗状況を検証する場に参加できなくとも、日本そしてアフリカの市民社会からの評価、要望を伝える場を追及して行かなくてはなりません。一方、同じ場で、「ODA を実施する立場から」と前置きして別所国際協力局長(当時)は、「援助の効果的、効率的な実施のためにNGOとも話をしていきたい」と発言していました。TICAD IVに向け、日本政府がアフリカ向けODA 倍増をプレッジ(公約)したことを受け、どのようにODA 倍増を進めていくのか、実際に倍増されるのか、そして市民社会がこのODA 倍増とどのように関わっていくのか、について協議の場を持つことになり、7月24日と8月7日にTNnetの運営委員が中心となって外務省国際協力局と意見交換を行いました。

TNnet は9月30日に最後の会合を持ち、活動を終了することになっています。TICAD IVフォローアップの取り組み、アフリカ向け ODA 倍増に関わる働きかけのいずれも、TNnet の成果を引き継ぎアフリカでのMDGs達成をめざすネットワークが担うべき課題です。谷村: TNnet は TICAD IVに向けた取り組みを行うネットワークという限定があったので、がんばれた部分もあったように思います。今年7月の G8 サミットに関わる取り組みが終わって、今はちょっと放心状態です。TICAD IVや G8 サミットに関わる取り組みのために後回しにしていた仕事にも追われています。

現在、アフリカに関わる NGO のネットワークはありませんし、アフリカを課題にした外務省と NGO の定期協議も定期協議会以外にはないので、ネットワークの必要性は理解できます。ネットワークとして活動してきたからネットワークを作るというのではなく、目的、活動内容、活動の期限あるいは到達目標を明確

にしていくことが重要です。

- G8 サミットでもアフリカが大きなテーマになりました。そこで語られたことやプレッジ(公約)されたことも含め、アフリカ開発・支援の課題について市民も息長くフォローしていくことが求められていると思います。市民社会にとって、何が一番の課題でしょうか。

谷村: TICAD IVに関連して非常に多くのアフリカ報道がありました。多くの人は、メディアによる報道を通してアフリカ開発・支援の課題に接していると思います。ですから、メディアへの働きかけが重要です。TICAD IVそして G8 サミットのフォローアップ・プロセスにもメディアが注目し、適切な報道を行うよう働きかけていく必要があります。

一 NGO フォーラムも活動を始めた後で参加する NGO が増え、また課題も明確になってきたということで、選挙による役員選出を含む第二期への移行を行いました。 TNnetも運営委員会立ち上げ、参加問題から政策アドボカシーへの転換を明確化する第二ステージへの移行に伴い政策チームと PR チーム立ち上げ、そして NGO フォーラムとの連携を深めつつ TICAD IV、G8 サミットに向けて活動を続けてきたことがわかりました。アフリカでの MDGs 達成が困難視されているからこそ、TNnet の成果を引き継いでアフリカ開発・支援の課題に取り組んでいくことが必要でしょう。気候変動への対応などの課題にも、今後多くの方の参加を呼びかけていきたいと考えています。

2008年8月15日 ワールド・ビジョン・ジャパン事務所にて

TNnet 事務局活動日誌

TNnet secretariat's report

山田 真理子 YAMADA Mariko TICAD IVがようやく終わった。長かった。TICAD IV 前はまさに体力勝負。毎日睡眠を削っての業務で、昼食さえ箸を片手に、空いた方の手で仕事をしていた。TICAD IV 本番中はついには熱を出し、声さえ出なくなったので、薬を処方しながら会場を走り回った。自分でもよく踏ん張ったと思う。

私は、TICAD IV・NGO ネットワーク (TNnet) の事務局である TICAD 市民社会フォーラム (TCSF) で、2007年4月から働き始めた。その時には TNnet はすでに発足しており、2回ほど会合が終わっていたため、途中から TNnet の事務局業務を行うことになったのだが、私自身、初めは TICAD についてほとんど知識がなかったため、戸惑うことが多かった。



やまだ まりこ: TCSF 国内連携担当。関西で大学の事務職員を経て、2007年4月より外務省 NGO 専門調査員として TCSF で働く。趣味は散歩(特に葉っぱ観察)。岐阜県出身で赤味噌好き、中日ドラゴンズ好きの東海人であるが、青春時代を関西で過ごしたせいか、今でも標準語より関西弁の方が心地よい。アフリカへの渡航経験は話題のジンバブエのみ。

A concept proposal: The TICAD Watch

Setting and maintaining an effective role for African and Japanese CSOs in the Implementation of the Yokohama action plan



Gustave Assah

Chair of Civic Commission for Africa http://www.ticad-csf.net/

Introduction:

This concept note is a follow up from the outcomes of the TICAD IV process which culminated into the Yokohama Action plan. The proposed interventions are aimed at ensuring that CSOs remain effective actors in the implementation of the TICAD action plan through establishing the TICAD Watch process. The paper is based on the recognition that a level of success was achieved in getting CSOs in both Africa and Japan to participate in the TICAD IV. This paper further appreciates that the issues at stake in the post-TICAD IV era and as contained in the Yokohama action plan are too crucial for the CSOs not to be part of.

The paper however also notes that the CSO influence on the TICAD IV process would have been greater if there had been more solidarity and collaboration within the wider range of CSOs in Africa and the Diaspora. Through this proposed TICAD- Watch therefore, greater solidarity, cooperation and networking among CSOs both within Africa and beyond is proposed. The TICAD- watch is further anticipated to pave the way towards a greater CSO role towards, during and beyond TICAD V in the next five years.

A background and rationale

On realizing that there was no effective African CSO participation in previous TICADs and yet TICAD was set up to champion Africa's development, Japanese CSOs initiated the link with African CSOs during the WSF at the beginning of 2007 in Nairobi.

Consequently the active engagement of both African and Japanese CSO in the TICAD process was initiated. This was achieved through both a series of formal meetings⁽¹⁾ held in Africa and Japan as well as through other linkages and networks that existed among African and Japanese organizations and individuals. The following are some of the outcomes:

 The link between and among African and Japanese CSOs was strengthened and both gained increasing presence and visibility in the TICAD process.

- CSO visibility gained increasing momentum and relevancy until the TICAD IV itself.
- The CSO collective views and recommendations on the TICAD IV key themes (Stimulate economic growth, human security with achievement of MDGS, peace consolidation and democracy and Environment and climate change) were represented in the "Voices" and shared widely.
- CSOs, albeit to a humble level, managed to become a credible part of the TICAD process in both Africa and Japan and in the society as well as the general public.

During the TICAD IV conference itself CSOs were visibly active and among other issues emphasized the following:

- Actively advocated for access to and total participation in the TICAD IV plenary and breakout sessions and the eventual outcome were richer because of this participation.
- Both African and Japanese CSOs engaged actively with the media to communicate and articulate their views on the TICAD process and follow up mechanisms.
- African and Japanese CSOs shared the "Voices", during the plenary of TICAD IV.
- A wide range of CSOs, not necessarily C-CfA members, International organizations, Diaspora members, artists, singers etc took part and validated the importance for processes such as TICAD to embrace all various CSOs actors in order to harness their potential to contribute to the development process.

Implications for the way forward

The major reason why CSOs desired an active role in the TICAD was to enrich the TICAD IV process and increase its relevance and effectiveness in responding to the views and needs of people in Africa. To some extent, the above was achieved although the eventual TICAD action plan is unclear on the role expected of CSOs. Through the proposed TICAD Watch the participation of CSOs in implementing the

30 アフリカ NOW 82

TICAD action plan and monitoring the various aspects of the action shall be guaranteed. And because this function is not clearly defined in the work plan itself, is a further justification that mechanisms to ensure CSOs active engagement in this process are critical.

Objectives

The overall objective of the TICAD Watch process is to build on the CSO gains made during the TICAD IV. Through the TICAD Watch, CSOs in both Africa and Japan shall monitor and actively follow the implementation of the TICAD action plan to ensure that it constantly exhibits a people centered focus.

This shall specifically entail:

- **1.** Regional and national mobilization and organization around the themes of the YOKOHAMA Action plan.
- Strengthening networking among organizations working on issues prioritized and submitted by African and Japanese CSOs to TICAD.
- Lobbying and the advocacy in connection with implementation and follow-up of the YOKOHAMA action plan commitments.
- 4. Compile and disseminate independent reports to TICAD follow up committee and the other stakeholders.

Main activities

Objective 1; Regional and national mobilization and organization around the themes of the YOKOHAMA Action plan.

- Feed back and dissemination of the Yokohama decisions and action plan.
- Mobilize, set up and coordinate networking mechanisms among various CSOS actors in Africa targeting the Yokohama action plan.
- Create and maintain a link between grassroots community realities and national, regional and continental and global processes that are related to TICAD.
- Create links between communities and defined action plan initiatives.
- mobilize public awareness and participation

Objective 2; Strengthening networking among organizations working on issues prioritized and submitted by African and Japanese CSOs to TICAD.

- Set up a website.
- Regularly share information (website) to ensure public and civil society ownership and interest in the YOKO-HAMA Action plan.
- Through regular communication, feed back and information exchange contribute to transforming the TICAD ac-

- tion plans into an effective instrument of African development.
- Develop and strengthen networking between African and Japanese CSOs.
- Organize and network at national and regional levels

Objective 3; Lobbying and the advocacy in connection with implementation and follow-up of the YOKOHAMA action plan commitments.

- Engage with the proposed TICAD follow up committee
- Constantly articulate the voices and concerns of marginalized people to ensure that they remain central in all initiatives undertaken under the Yokohama action plan.

Objective 4; Compile and disseminate independent reports to TICAD follow up committee and the other stakeholders including monitoring and evaluation.

- Monitor and evaluate the Implementation of the Yokohama action plan.
- Provide an evidence based CSO perspective by producing and disseminating an independent annual report.
- Participatory monitoring and evaluation of the YOKOHA-MA Action plan and its implementation among national, regional and continental CSO actors.
- Follow national and regional commitments
- Share information with Japanese CSOs.

Proposed strategy

- Information mobilization and dissemination.
- Creation of national and regional networking platforms that undertake thematic monitoring and evaluation.
- National, regional and continental lobby and advocacy.

Expected results

- Visible interaction and influence of the Yokohama action plan at various levels by CSOS (AU, ECOWAS, SADC, EAC, and Northern Africa).
- Stronger co-operation among African and Japanese NGOs.
- Clear idea of TICAD outcomes through active monitoring and evaluation.
- Reinforcement of the capacities and role of CSOs.
- CSOs including the media clearly accepted as an indispensable part of the TICAD implementation and TICAD V process.

[NOTE]

- (1) Formal meetings held included Nairobi, Tokyo, Lusaka, Tunisia, Libreville and during TICAD itself.
- (2) A common document in which CSOs expressed their views on a wide range of issues.

TICAD ウオッチ

「横浜行動計画」実施に関して、アフリカと日本の市民社会組織が効果的な取り組みをするための条件と活動について



グスターブ・アサー:アフリカ市民委員会議長

Gustave Assah: Chair of Civic Commission for Africa

はじめに

「横浜行動計画」に結実したTICAD IVプロセスの成果をフォローアップしていくために提案をしたい。TICAD ウオッチ・プロセスを立ち上げ、TICAD で作られた「横浜行動計画」の実施に関して市民社会組織(CSO) が効果的な取り組みしていくことを保証しようという提案だ。アフリカおよび日本の CSO が TICAD IVに参加し一定の成果をあげたことを踏まえた提案である。TICAD IV以降に検討対象となっている課題、また「横浜行動計画」に盛り込まれた課題は、きわめて重要であり CSO としても関わらないわけにはいかない。

一方、アフリカにおいて、また世界各地で暮らすアフリカ人コミュニティにおいて、もっと多くの CSO が連帯し協力しあっていたら、TICAD IVプロセスに対してより大きな影響力を行使することが可能であったことも忘れてはならない。したがって、TICAD ウオッチはアフリカ内外でのより広範な CSO 間の連帯・協力・ネットワークをめざしている。さらにこれから5年間、TICAD Vに向けた取り組み、TICAD Vにおける取り組みそしてそれ以降の取り組みの中で、CSO がより大きな役割を果たすためにも必要である。

背景と根拠

TICAD がアフリカ開発に寄与するものとして開催されているにもかかわらず、アフリカの CSO がこれまでの TICAD に効果的に関わっていなかったことから、2007年1月にナイロビで開かれた世界社会フォーラム (WSF) の際に、日本の CSO がアフリカの CSO と連絡を取ろうとしたのが、ことの始まりである。

その後、アフリカと日本の CSO は積極的に TICAD プロセスに関わっていった。具体的には、アフリカと日本で開かれた一連の会合 (1) およびすでにアフリカと日本の団体や個人同士がつくってきた連携やネットワークを通して取り組みは進められた。そして以下の

成果があがった。

- ・アフリカと日本の CSO 間の連携が強まり、TICAD プロセスにおける CSO の影響力と注目が高まった。
- ・TICAD IVに向けて CSO への注目が勢いをまし、また他とのつながりを深めていった。
- ・TICAD IVの主要テーマである経済成長促進、国連 ミレニアム開発目標 (MDGs) の達成・平和の定着・ 民主主義を通した人間の安全保障、環境と気候変 動への対応に対する CSO の共同の見解と提言が "Voices2008"⁽²⁾ にまとめられ広く共有された。
- ・CSO は、十分とは言えないにしても、アフリカにおいても日本においても、また関係者の中でも、広く社会的にも TICAD プロセスの中で信頼のおける参加者になることができた。

TICAD IV本会合期間中も CSO は注目を集め、次の 役割を担った。

- ・TICAD IV全体会合および分科会に積極的に参加し、 より豊かな成果をあげた。
- ・アフリカおよび日本の CSO が積極的にメディア対応を行い、TICAD プロセスおよびフォローアップメカニズムに関する見解を明確に伝えた。
- ・TICAD IV本会合で "Voices 2008" を紹介した。
- ・アフリカ市民委員会 (C-CfA) 参加団体をはじめ、広範な CSO、国際組織、在外アフリカ人コミュニティ、芸術家、歌手らが参加し、それぞれが持つ力を開発プロセスに寄与するように方向付けるために TICAD のようなプロセスにさまざまな市民社会のアクターを参加させることが重要であることを明示した。

今後に向けて明らかになった課題

CSO が TICAD に積極的に関わってきたのは、TICAD IVプロセスをアフリカの人々の考えと必要に関わる実 効性のあるものにするためであった。この狙いは一定程度達成されたが、TICAD で採択された「横浜行動計画」において CSO が担うべき役割は明確ではない。

TICAD ウオッチを通して、「横浜行動計画」実施への CSO 参加および行動をさまざまな観点からモニターし ていくことを保証しなくてはならない。 CSO が担うべき役割は「横浜行動計画」に明記されていないので、 CSO が計画を実施する際に主要な役割を担っていくことを保証するメカニズムが必要であることを主張することが重要である。

日的

TICAD ウオッチは、TICAD IVに向けた CSO の取り 組みを踏まえたものでなければならない。TICAD ウオッチを通して、アフリカと日本の CSO は TICAD 行動計画実施が人々を中心にしたものであるようにモニターし、また実施に積極的に参加していかなくてはならない。特に、以下の取り組みが必要である。

- 1.「横浜行動計画」の対象となっていること関する地域横断的な、また国ごとの大衆動員と組織づくり
- 2. アフリカと日本の CSO が TICAD に向けて提起した 課題に関する組織間ネットワークの強化
- 3.「横浜行動計画」の実施およびフォローアップに関するロビイングとアドボカシー
- 4.TICAD フォローアップ委員会および他の関係者に向けた独自レポートの作成と配布

主要な活動

目的 1. 「横浜行動計画」の対象となっていること関する地域横断的な、また国ごとの大衆動員と組織づくり

- ・「横浜宣言」、「横浜行動計画」へのフィードバック と広報
- ・「横浜行動計画」に関するさまざまな CSO 間のネットワーク構築と運営
- ・草の根の人々の現実とTICADに関わる国ごとの、 地域横断的なそして国際的なプロセスをむすびつけ る取り組みの開始と継続
- ・コミュニティと行動計画実施の動きをむすびつける 取り組み
- ・(「横浜行動計画」に関する) 認識形成と参加の取り 組み

目的 2. アフリカと日本の CSO が TICAD に向けて提起した課題に関する組織間ネットワークの強化

- ウェブサイト開設
- ・「横浜行動計画」への広範な市民の関心を高め、関 与を促すための定期的な情報提供
- ・恒常的な連絡体制による、TICAD 行動計画をアフリカ開発に有効なものへと変えていくためのフィー

ド・バック、情報交換

- ・アフリカと日本の CSO 同士のネットワークの強化
- ・国ごと、地域横断的な組織作りとネットワーク

目的 3. 「横浜行動計画」の実施およびフォローアップに関するロビイングとアドボカシー

- ・TICAD フォローアップ委員会への参加
- ・「横浜行動計画」実施にあたって周辺化された人々 の課題に焦点があたるようにするために周辺化され た人々の声と課題を恒常的に明示

目的 4. TICAD フォローアップ委員会および他の関係 者に向けた独自レポートの作成と配布

- ・「横浜行動計画」実施状況のモニターと評価
- ・毎年、独自の調査報告を作成し、実態に即した CSO の見通しを提示
- ・「横浜行動計画」への参加型モニターおよび評価と 国ごと、地域横断的、大陸横断的な CSO による実施
- ・国ごと、地域横断的な取り組みのフォローアップ
- ・日本の CSO との情報共有

戦略

- ・情報収集と提供
- ・テーマに基づいたモニターと評価のための国ごと、 地域横断的なネットワークの創出
- ・国ごと、地域横断的そして大陸横断的なロビー活動 とアドボカシー

めざすべき成果

- ・アフリカ連合(AU)、西アフリカ経済共同体 (ECOWAS)、南部アフリカ開発共同体(SADC)、アフリカ経済委員会(EAC)および北米など、さまざまなレベルでの「横浜行動計画」に関する意見交換と影響力の行使
- ・アフリカと日本の CSO の協力関係強化
- ・モニタリングと評価による TICAD 成果の明確化
- ・CSO の能力と役割の強化
- ・CSO およびメディアが TICAD 成果の具体化および TICAD Vプロセスにとって除外できない参加者であることの明確化

【注】

- (1) これらの会合は、ナイロビ、東京、ルサカ、チュニス、 リーブルビル、そして TICAD IVの期間中に開催された。
- **(2)** TICAD IVの議題になった広範な課題について意見を表明した CSO の共同文章。

日本語翻訳:斉藤龍一郎